

時評 考古学とジャーナリズム

小野 昭

考古学は発掘調査による新発見がよくあるので、ジャーナリズム、特に新聞・テレビの報道とつきあうことが多い。考古学とジャーナリズムの関係を一般的に問題にして、そこから過去、現在の様子と、将来のありかたを引き出したりするのはあまり性に合わないので、ここでは私の体験を通してことに限定して、現状が昔と変わったのか、将来どの点が改善されなければならないのか、思いをめぐらせてみよう。

ジャーナリズムとの関係で最も劇的な状況に遭遇したのは、いうまでもなく二〇〇〇年十一月に暴露された「旧石器捏造事件」である。あれほどまで完璧に新聞によって暴露された事件も例を知らない。同時にわれわれ旧石器時代を対象にしている研究者にとって、これほどの屈辱と社会的責任の重さを思い知らされたことはかつてなかった。

「成果」の顕彰・宣伝も、暴露もマスコミのもっている両刃の剣である。学界、一般市民、教科書にまで、なにゆえ短期間で「成果」が定着していったのか。その背景は、事件直後にすでに小田静夫が書いている（二〇〇一）。こうしたスキヤンダルは国際会議などに出れば、誰がやったかではなく、日本は何をやっているのかと国民国家単位で総括される。

二〇〇一年にベルギーのリエージュで開催された国際先史学原史学会議では会議の場以外でもタイ、フィリピン、アメリカ、フランスの同僚からきちんとした説明を求められた。また同年ドイツのバートフランケンハウゼンの国際シンポジウムでも、私は事件の背景の苦しい顛末の説明をおこなった。ドイツの研究者は事件のことはよく知っていた。フランクフルター・アルゲマイネ紙の特派員アン・シュネッペンは二〇〇〇年十一月七日に写真入りの大見出しで「埋め

て発掘—日本のある考古学の研究成果はいかにして暴露されたか—の記事を発信していたからである。ただ一個所あった誤りは、藤村新一の頭に「プロフェッサー」が付いていたことである。「傑出した考古学者」、「東北旧石器文化研究所」という前提に立って、ドイツ人の彼女は確認を取らずに「プロフェッサー」を付けたのだろうか。いや至極当然のこととして付いてしまったに違いない。バート・フランケンハウゼンの国際シンポジウムの会場には一般市民の参加もあった。私が「日本列島最古の人類の居住を証明するために、石器を古い層準に埋めそれを発掘した」と説明したとき、会場はどよめいた。今でも忘れることはできない(小野二〇〇二)。

日本考古学協会の特別委員会による六二五頁の検証報告書は二〇〇三年に刊行され(日本考古学協会二〇〇三)、私も第一部会(遺物検証)の責任者としてエネルギーを二年間これに注いだ。その後、旧石器研究の国際コミュニティに説明責任があるので、二〇〇四年カナダのモントリオールの国際会議(最も規模の大きなアメリカ考古学会)には、私を含む日本考古学協会の代表四名は、検証の後始末報告をおこなった。

考古学におけるマスコミのキーワードはいつも、新発見、最古、最大、この三つであった。これは捏造事件後も変わっていない。これから外れるとあまり注目されないし、これになんとか関連するように話を持つていこうとする。私が岡山大学の助手であった頃、やや古そうな旧石器を採集したので、その地点の発掘をした。しかし石器は全く発見されなかった。発掘直後の朝日新聞の岡山版には「何も出なかった岡大の発掘」と大見出しが躍った。こんなこともある。都立大に赴任してからのこと、ある女性週刊誌の記者が研究室に取材にやってきた。テーマの関係上間違つて報道されては困ると思つて、分かりやすくしていねいに説明したつもりであった。だが、誌上には私が話したこととまったく関係のないことが、私の発言としてカギ括弧付きででていた。記者が創作したのである。ということは、この程度のことをわれわれは読まされている可能性があるということでもある。

捏造事件後、マスコミの対応はどう変わったのか。新発見、最古、最大は変わらないが、あつかひは少しずつ変化している。センセーショナルなあつかひは少なくなったといえるだろう。まとまった記事は記者の署名入りが多くなつ

たように思われる。われわれの対応もいきおい慎重にならざるをえないし、発言がどのようににあつかわれるか、だめ押しをするようになった。また記者が書いた文章を確認のため私宛に電子メールで流してくるようになった。こうしたことは私宛だけでなく一般的な傾向になっているのではないか。

ただ、私が取材で話した内容とは直接関係はないのだが、誤解を防ぐために確認を求めてきた文章の別の個所について私の意見を述べたこともある。三万数千年前に刃部だけを磨いた斧形をした特徴的な石器がいまのところ日本列島にだけ分布する。朝鮮半島にも中国にもロシア極東域にも分布していないのである。当時の日本列島に展開した人類集団が新たに生み出したものであるようだ。これを「メイド・イン・ジャパン」と表現してあったので、電話で私はつい怒ってしまったのである。

電話の向こう側の記者はキョトンとした様子であった。怒りが静まるまで十秒程度の沈黙が必要であった。説明をしたが了解されなかったようで、後日送ってきた掲載紙には「メイド・イン・ジャパン1号」と大きくあった。捏造事件の前後、韓国や特に中国では、日本列島で古い石器の「証拠」がどんどん遡っていき、ホモ・エレクトス（原人）段階から認知構造がヨーロッパや中国の同時代化石人類とはかけ離れて優れていたかのようなキャンペーンと映ることへの危機感があったのである。

「ジャパン」以前は「日本列島」と地理的なニュートラルな表現にして、そこに展開した人類の地域史として表現すべきで、「メイド・イン・ジャパン」では現在の国民国家の領域を表現する日本と混同されやすいので避けるべきであるというのが私の趣旨であった。理解されなかったようである。「1号」のおまけまで付いていた。

日本におけるサイエンス・ジャーナリズムはどうかになっているのか。歴史学の世界のことは私にはよくわからないが、人類学（特に人類進化や化石人類の世界）、地質学、古生物学、先史考古学などの分野では、例えば「ネイチャー」や「サイエンス」誌をみると掲載論文の他に掲載論文を解説ないし背景を説明する解説記事も必ず掲載されている。一般の読者どころか分野の異なる研究者には論文だけではとうてい内容が理解できないものが多いからである。人類進化に関連

した遺伝学関係の論文などは、解説記事を読んでもらちが明かないことがおおく、関連分野の同僚に会って解説してもらわなければならないことが多いのが現実である。

アングロ・アメリカだけでなくヨーロッパを含めても、こうした解説の科学記事を書くサイエンス・ジャーナリストは日本とくらべて比較にならないくらい多いといって過言でない。逆に日本では少なすぎる。研究者が解説記事を書くような時代は遠く過ぎ去っているにもかかわらず、考古学の分野では研究者がそんなこともやったりしているのである。日本でも本格的なサイエンス・ジャーナリスト養成の問題は九〇年代からいわれており（稲生一九九五）、日本のサイエンス・ジャーナリズムは「発表ジャーナリズム」であるとさえいわれてきた。

科学雑誌に掲載される論文などの解説を書くサイエンス・ジャーナリストと新聞、テレビのジャーナリストを同列に議論することは適切を欠くかも知れない。しかし根ではつながっていることもまた確かである。考古学に関してはさきの新発見、最古、最大はついてまわるが、それだけに終わらせないようにすることが課題である。われわれの対応もそのことに特に注意が必要である。中長期的にはサイエンス・ジャーナリストをきちんと育成していける仕組みの整備が必要である。

今回は触れなかったが、テレビでは事情はもっと大変である。考古学の関連でテレビに出演して、解説ではなく特定問題を議論する際などは、その時間内のストーリーに流し込まれることが多く、私の数多くない経験でも愉快な想い出は少ない。テレビについてはそもそも多様な説の紹介よりもある説に沿って流れを作ることが多いので、今後サイエンス番組にどのような可能性が残されているのか、今の私には分からない。

文献

稲生 勝一九九五「科学ジャーナリズムの問題点」『日本の科学者』第三〇巻、第九号

小田静夫二〇〇一「日本旧石器研究の封印された論争」岩波『世界』一月号（第六八三号）

小野 昭二〇〇二「旧石器捏造問題をとおしてみる考古学のありかた」『日本の科学者』第三七巻、第五号
前・中期旧石器問題調査特別委員会編二〇〇三『前・中期旧石器問題の検証』日本考古学協会